「WWL」県内拠点・連携高

世界的課題解決へ 国内外生徒と議論

文部科学省がグローバル人材育成を目指す「ワールド・ワイド・ラーニング（WWL）コンソーシアム構築支援事業」の拠点校に指定されている三島北高（鈴木敏彦校長）で9月中旬、一連の活動の集大成となる「高校生国際会議@Mishima」が開かれた。コロナ禍で対面での交流が制限されながらも、各国間で生徒が課題として共有できる「SDGs（持続可能な開発目標）」を切り口に、「crisis（危機）に負けない社会づくり」をテーマに議論の準備を進めてきた。（社会部・大須賀伸江）

海外の高校とオンラインでつなぎ、意見交換する生徒たち＝9月中旬、三島市の三島北高

連携校は沼津東高、静岡高、静岡市立高のほか長崎東中・高（長崎県）や仙台一華中・高（宮城県）の計5校。県内3校の生徒が集まり、県外連携校と米国やオーストラリアなど4カ国の高校とオンラインでつないで持続可能な社会づくりに向けた議論に臨んだ。

実現性も考えて

前半は「貧困・飢餓」や「ジェンダー・平等」などテーマごと5グループで研究発表をした。「水・エネルギー」グループでは、途上国支援の手法を各校が提案した。三島北高の生徒は持ち運べる消毒液を提案。長崎東高は、虫歯予防に貢献するキシリトールガムの手作り法を説明し、米国オワトナ高はコロナ禍や貧困で学校に行けない子どもたちのためのリモート教育を提案した。アドバイザーを務めた常葉大の山本隆三名誉教授はそれぞれの発想を評価しつつも「費用負担の面から、途上国の人々が着手しやすいか検討してみて。国の経済状況、国民の1日当たりの収入や生活の実態を具体的に調べて実現性を考えることが重要だ」と求めた。発表した三島北高の尾和ほのかさん、村松大雅さん、新谷真優花さんは「構想を実現に導くためには視野を広く持たねばならないと感じた。学びになった」と振り返った。

「同じ」に親近感

後半はメンバーを組み替え、オンライン参加の生徒も交えて少人数のグループワークを行った。内容は幅広く、若者の政治的関心の低さについて生徒が「政治家を目指す同年代を見たことがない」と言うと、台湾の生徒が「身近にいる」と応じる場面も。台湾の生徒が「未婚率の上昇が社会課題になっている」と話すと、「日本も」とうなずき、ベビーシッター利用など子育て文化の違いを説明しあった。会話は全て英語。英語が堪能な拠点・連携校のOB、OGの大学生がアシスタントを務め、やりとりを支援しながら、議論を進行させた。生徒たちは、英語での言語化が難しい場面でも類似の言葉に換えるなどして自らの思いを語ろうとした。静岡高の久保田さくらさんは「外国の生徒との意見交換は初めてだった。国内の課題として少子化をとらえていたが、台湾も同じだと体感でき、親近感を持てた。有意義だった」と振り返った。

SDGsなど 視野広く

高度な学習の場

三島北高は2019年度のWWL事業指定を受け「高度な学習の場の提供」を目標とし、①生徒が大学授業を受講し単位を取得する制度の研究②科学や数学などを軸とする「STEM教育」を実施する米国ミネソタ大への生徒派遣③5校と連携した世界的な社会課題の研究―を柱に掲げた。

県内連携校も含めた各校で「総合的な探究の時間」などに国際会議のテーマを組み込み、校内で議論を深めたほか、全国大会への参加や地域でのフィールドワークを通じた課題探求によって議論の素材を作り、生徒の意識を高めた。

国際会議は緊急事態宣言中だったため一般公開を取りやめ、幅広く参加者が集う予定だった並行プログラムはオンライン開催に。各高校の教員は廊下から参観するなど対策を講じながら実施した。

静岡新聞

© 静岡新聞社　無断複製転載を禁じます